news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

西田潤《No.3-A 絶》2001
「コレクション／ドネーション」展より

82 2015

コレクション／ドネーション或いは美術館の誕生

佐伯祐三《レ・ジュ・ド・ノエル》1925（大正14） 油彩、キャンバス［玉井一郎氏寄贈］

佐伯祐三
《広告のある門》
1925（大正14）
油彩、キャンバス
［玉井一郎氏寄贈］

美術館は博物館の一種であり、日本では博物館法という法律で定義付けられています。これは、美術館に勤める人間にとっては常識ですが、博物館学芸員の資格を得るための特別な勉強をした人以外には、余り知られていないことのようです。

博物館法そのものは、「博物館の設置及び運営に関して必要な事項を定め、その健全な発達を図り、もつて国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的」とするもので、博物館の定義や事業、組織等について定められています。博物館の仕事は、「資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすること」と定義づけられています。法律の文章には、保留や注意書きがふんだんに盛り込まれており、読んですぐに理解することが難しいものですが、博物館の仕事はここに簡潔にまとめて述べられています。美術館でも色々な作品や作家について調べ、作品を集め、いたまないように守り、展示することを通じて広い意味での教育活動を行っているのです。

美術館へお越しになる皆さんは、ほとんどが展覧会をご覧になることを目的とされているのではないでしょうか。展覧会において、作品の美しさや描写の意味、制作の背景にある社会的、歴史的なできごと、あるいは作者の生涯などについて学ぶ機会を得ることができます。楽しむこと、知識を得ること、くつろぐこと、考えること、新しいものと出会うこと等々、展覧会を通じて得られる体験は無限定ですが幅広く、感情や知的な関心の幅を広げることができます。優れた美術作品は、見慣れたものであっても常に新しい見方を要求し、新しい面を見せてくれます。展覧会は、まさにそのような美術作品と私たちが出会う場に他なりません。コレクションは展覧会を支える柱でもあるのです。

では、展覧会で出会う作品はどのように集められるのでしょうか。

一般にものを集めるには買ったり貰ったりするわけですが、作品も例外ではありません。集める方針に従って、コレクションをより充実させるにはどんな作品を加えていくのがふさわしいのか、常に考えながら作品を探し、購入できる場合には購入します。一方、収集の中では寄贈も大きな割合を占めています。当館のコレクションを見ても、寄贈いただいた作品は点数で6割以上になります。芸術家自身やそのご家族など、作品に直接関係する方からのご寄贈がある一方、個人的に集められた多くの作品を譲り受ける場合も少なくありません。

コレクション展の中で開催する「コレクション／ドネーション」という特集展示は、この「寄贈」からコレクションを見直してみるものでした。ドネーションという言葉はまだ一般的ではないかもしれませんが、寄贈を意味する英語です。個人が集められたコレクションを寄贈いただいた例を中心に見ることで、当館のコレクションの一面をとらえることができるものと思います。

これまでにまとまった作品を寄贈くださった方々として、玉井一郎、森林平、篠田博之・めぐみ夫妻、ブリッジ、田中恒子の各氏のコレクションを紹介しています。

玉井一郎氏（1926-2003）は、阪南市に生まれ、和歌山市で医師を務めるかたわら、当館友の会会長をはじめ様々な役職を歴任した人物でした。和歌山県の文化振興にも様々な面で関わられましたが、当館にも数度に分けて作品を寄贈されました。瑛九や原勝四郎の作品など、総点数は279点にのぼりますが、中でも13点を数える佐伯祐三作品は、その生涯を通覧できる重要なものです。

森林平氏（1921-2005）氏は和歌山県すさみ町出身で、森精機製作所を創業し、工作機械製造のトップ企業に育てた人物です。ご自身が卒業された和歌山県師範学校の跡に建った当館に、故郷への恩返しとして集められた作品を平成13年度に寄贈されました。

和歌山市内で医師として仕事をされた篠田博之氏（1929-2011）とめぐみ氏（1938-

松田文雄《老鍛冶屋》1940（昭和15）油彩、キャンバス
［森林平氏寄贈］

2009）ご夫妻は、文化財保護などにも取り組まれましたが、優れた作品の公開を進める意図から、平成6年度以降数度に分けて作品を寄贈いただきました。その内容はルオーをはじめ、それまでに収蔵できていなかった梅原龍三郎ら日本近代の洋画など21点となっています。

ブリッジは個人ではなく、当館が続けて収集を行っている近・現代の版画コレクションをさらに充実させることを目指して、作品を収集し寄贈いただいた匿名のグループです。山本容子作品が代表的なものですが、現在は重要な作家として

木村秀樹《Glass Angel 2》1982（昭和57）
シルクスクリーン、紙 ［ブリッジ寄贈］

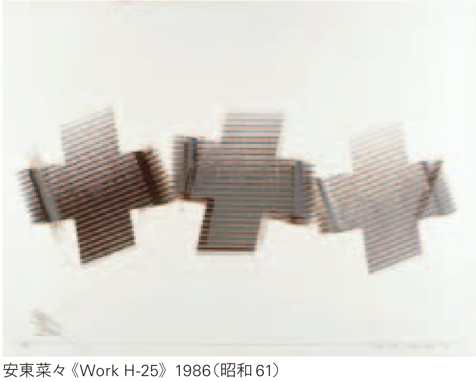
安井曾太郎《［桃］》 制作年不詳
水彩、紙 ［篠田博之氏・めぐみ氏寄贈］

評価されている人を若い頃から応援し、評価の定まっていなかった作品をコレクションに加えていただきました。

地元にゆかりのある方が、地元の美術館の充実を願って作品をご寄贈くださるばかりではありません。

田中恒子氏（1941-　）は、和歌山県とは特に関係のない方でしたが、当館の活動をご覧いただいて、収集された作品のご寄贈を決められました。住居学の研究者であった田中氏は、現代美術と一緒に暮らすことを実践されていましたが、作品の保存と公開、そして社会に貢献する方法として、作品の寄贈を選ばれたのです。総点数は860点となり、多様な作品が含まれていますが、展覧会では若い作家を応援することを主眼に収集された作品を中心に紹介しました。

この展覧会のきっかけの一つとなったのは、ハーバードとドロシーのヴォーゲル夫妻が、収集したコレクションを寄贈する過程を記録した映画『ハーブ＆ドロシー』が注目を集めたことでした。彼らが収集を始めた当時、まだほとんど認められてなかった作家たちは、今日では美術の重要な潮流を形づくったものとして高く評価されており、世界中の美術館に作品が収集されています。展覧会では当館の収



安東菜々《Work H-25》1986（昭和61）
シルクスクリーン、紙 ［ブリッジ寄贈］

蔵作品から、ヴォーゲル・コレクションに含まれている作家の作品も紹介しました。

映画『ハーブ＆ドロシー』には、美術館にとっても興味深い内容が多く含まれていましたが、特に2本目の『ふたりからの贈りもの』ではアメリカのいくつかの美術館が取材され、それぞれ個性的な運営がなされていることが記録されていました。博物館や美術館という制度そのものは、日本には欧米からもたらされたものです。そのため、理想の美術館像が欧米にあり、日本はそこからどれくらい遅れているかという議論もしばしば見受けられます。しかし、アメリカにも多くの美術館があり、規模も歴史も内容も違う各館では、運営の事情や問題点もそれぞれ異なっていて、中には潰れてしまう施設もあったりします。

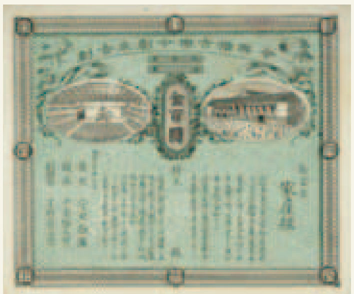
ナショナル・ギャラリーのキュレーターだったルース・ファインが映画の中で、「美術館というものはそもそもコレクターが築き、コレクターが支えてきた。美術館というのはコレクションのコレクションなのだ。」と述べています。日本の美術館に対しては、しばしば建物だけが建てられて美術館としての活動の実質を伴わない、箱ものという批判も行われてきました。当館も当初は建物だけから出発しましたが、多くの寄贈に支えられてコレクションが充実し、美術館らしい美術館として、博物館法の理念を具体化する活動を行えるようになったと言えるのではないでしょうか。　　　　（奥村泰彦）

染谷聡《縁鹿（サイクルジカ）》2008（平成20）
漆、薬莢、鹿の角、金銀、他 ［田中恒子氏寄贈］

特集展示

『版画』の明治 ―印刷と美術のはざまで

私たちをとりまくものの力



「新富座株券」1877（明治10）銅版、紙　個人蔵

長谷川貞信（二代）『大阪錦絵新聞』第5号
1875（明治8）頃　木版、紙　個人蔵

漫画のキャラクターを真似して描いたことはありますか？

仕事場で直接尋ねられる人たちに聞いてみると、1960年代前後に生まれた人なら、多少の差はあっても経験があるとのことでした。私も描きました。模写だけではなくて、ペンやインクを揃え、「オリジナル」と称するものも描きました。漫画は美術の時間に教えられるものではなかったので、自学自習でしたが、学びたいことなら多少大変でも平気なものです。私が教えてもらった美術の授業は「写生」が主で、写生大会で漁港へ船を描きに行き、友達の肖像を描き、自画像を描き、静物を描いていました。

住んでいたところの近くに美術館はなかったので、絵画のイメージは、身の回りで実際に描いていた人たちの作品ができあがっていく様子と、印刷物でできあがっていました。漫画は先生を含めた大人たちがとくに薦めるものではなくても、名画の展覧会の図録や画集と、印刷物という点でほぼ同じところにありました。

近代美術の地平を拓いた画家たちにとっても、彼らが囲まれていた印刷物でできたイメージの海は、私にとっての画集や漫画と遠いものではなかったのではないかと思います。しかも、100年以上前の美術の授業は、お手本を模写することが主で、お手本の教科書と彼らとは、私たちと印刷物以上に近しい関係にあったと言えます。

いまのように、何日か放っておくとポストが詰まるほど、印刷物があふれていた時代ではなくても、量より質と言うべきか、彼らが手にしたであろう当時の印刷物は、現代の精巧な印刷物とは異なる魅力を放っています。写真製版が普及する以前の印刷物は、木版、銅版、石版といった、現在の版画の技法で作られていました。美術作品としての版画として作られていたわけではなく、「刷りもの」とも呼ばれます。

明治以降、近代化をめざし、殖産興業政策を進めた日本は、さまざまな技術を西欧から学んでいました。印刷業もその例にもれず、江戸時代からの伝統がある板目木版、銅版に加え、文字の印刷には活版が、画像の印刷には木口木版、石版の技術が西欧からもたらされ、多様な技法による印刷物が発行されるようになりました。現在見ることができるそれらの印刷物は、機械に頼れない時代に、技術者たちが自身の手の能力を最大限引き上げた結果として、驚くほど精緻でありながら、人の手の温かさを感じさせるものです。おそらくそれが、精密で均一な仕上がりを持つ現代の印刷物に慣れた目を引きつけるのだと思います。それは同時代の人が抱いた思いに通じるものだったことでしょう。

私たちが漫画のキャラクターを描き写したように、近代の美術家たちが、子どもの頃に本の挿絵を模写し、雑誌の口絵を集めた思い出話はしばしば耳にします。ときどき古書店で見る、集めた口絵を綴じた冊子や、挿絵のスクラップブックは、著名な美術家だけではなく、一般の人にとっても、いかにそれらの印刷物が大切なものだったのかということを示しています。

これらの人の手から生まれた印刷物は、それに囲まれて生活する人たちの心に「刷りもの」へのあこがれを育み、印刷術で可能な表現を追求させるに十分な魅力を持っていたことは想像に難くありません。明治、大正期に手書きで作られた私製本をみると、活字のように可能な限り粒を揃えてペンで書かれ、配置を工夫して美しくレイアウトされた本文と、オリジナリティのあるそれぞれの画風でありながら、かつ挿絵のスタイルをもって整えられた図版との対比に、印刷物そのものへの関心が強く表れています。

また、印刷物を描き写すだけではなく、印刷すること自体に憧れを抱いていたことが、明治40年前後に現れた「創作版画」が生まれた背景にあるのではないかと思います。明治期の印刷物に囲まれて育った版画家たちによって、大正期、昭和初期に創作版画誌が次々に刊行されたのも、広く版画作品を発表するために雑誌のかたちが合っていたというだけではなく、印刷物の形式に魅力があったからでしょう。なにが明治期の実用的な印刷物をかくも魅力的にしているのか、よく見て考えたくなります。

江戸時代の浮世絵の伝統を受け継いだ木版の揺らぎのない線と鮮やかな色彩、木口木版の正確無比な刀の跡。石版に細筆やガラスペンで微細な点を並置し、版を重ねることで色彩と陰影を作り出した多色石版や、クレヨンのデリケートな筆致が上品な単色石版。腐食によって製版される、繊細でありながら確かさを示す銅版。作品を前にして最初に受ける印象は、技法の特性に左右されるものなのかもしれません。

しかし、一つひとつ見比べていくと、同時代には版画が美術家の仕事として十分に認められていなくても、作者あるいは技術者によって表現の質がまったく違

「神田・穂積　風月堂　ビスケットラベル」明治20年代
石版、紙　個人蔵

「貴顕令嬢」1889（明治22）　石版、手彩、紙　個人蔵

鈴木蕾齋「引札 蝙蝠傘綿フランテル 卸商」1887（明治20）頃　木版、紙　個人蔵

森琴石『小学用地図』1877（明治10）
銅版、木版彩色、紙（冊子）　個人蔵

岡村政子『時事新報』第5000号附録
1897（明治30）石版、紙　個人蔵

うことに気づきます。

表現すべきものが求められるのが美術作品ですが、表現すべきものを実現するためには技術が必要です。印刷術から出発した版画は、とくに表現と技術の関係が深いために技術的な側面が目立つこともあります。美術というより印刷に近い印象を受けることもあるのはそのためです。しかし技術の精華というべき実用印刷で、表現の質がはっきり見られることは興味深いことであり、それが明治期の実用印刷物の魅力なのです。印刷物を集め、印刷物のスタイルを真似て回覧誌や同人誌を作った人たちは、質の違いを敏感にかぎ分けており、そこから、版画を印刷技術にとどめず、芸術に高めたいという願いが生まれたのでしょう。

今回、展示に出品していただくために「刷りもの」の個人コレクションを拝見して感じたことは、これらが今まで美しく残っているのは、残そうとした誰かの意志と、さまざまな幸運の結果なのだろうということです。いまの私たちにとっては、美術作品としての版画と同じ技術で作られているだけに、自然と粗末には扱えない気持ちになる「刷りもの」は、当時は大量に印刷されるものとして、特別に価値のある美術作品として位置づけられていなかっただけに、何かの折にまとめて捨てられるか古紙回収に出されてしまったかもしれないものです。

それがこうして残されているのは、権威のある誰かから美術作品としての価値が保証されていなくても、個人の目がこれらの実用的な印刷物に価値を見いだしていたからであり、そのことに頼もしさを感じます。そして時代を隔てて共感できる人に会った嬉しさがあります。おそらく、私たちの会うことができない未来の人は、もっと別の側面からも、良さを汲み取っていくことでしょう。資料を核として、時間をこえて人とつながっている感じがします。

特集展示「『版画』の明治 ―印刷と美術のはざまで」は、『「実用印刷物」のさまざま』、『「実用印刷技術」のさまざま』、『「実用印刷」と三人の画家』の3つのセクションで構成されています。当館コレクションの重要な部分を占める、創作版画から現代版画が生まれてきた背景としても、知るほどに興味深いジャンルです。また、なにが人を創作に向かわせるのかについて考える貴重な機会となるでしょう。

私個人は、ここ何年か調べ続けている、謄写版で出版や版画制作をした人たちの環境としても、深い関心を抱いています。いまのコピー機の役割をはたした簡易印刷術の技術者たちは、印刷術の最大の利点であった、早く、安価に複製できる特性にとどまることなく、読みやすく美しい字体を作り、美しい図版を製版するようになりました。それは彼らの生活を囲んでいた、人の手から生まれた印刷物が、彼らの「刷りもの」への憧れを育み、出版や印刷術で可能な表現を追求させるに十分な魅力を持っていたからです。現代の環境から、創造の種を育む技術を得ることと共に、私たちの会ったことのない時代の人が、何に心を打たれて自らの創造を続けたのかを、見てとっていただきたいと思います。　（植野比佐見）

撮影：長岡浩司（右３カットとも）

「和歌山と関西の美術家たち　リアルのリアルのリアルの」展より

伊藤彩さんのアトリエにて

3月14日から始まった「和歌山と関西の美術家たち リアルのリアルのリアルの」展は、和歌山県出身者を含めた、関西を拠点に活躍する作家5人の仕事を紹介する展覧会です。いずれも1970年代から1980年代に生まれた、これからの活躍が期待される若手の作家たちです。会場にはすでに作品が展示されていますが、ここでは本展出品作家のうち、最年少である伊藤彩さんの制作背景を紹介したいと思います。

伊藤さんは、本県有田市に生まれ、現在も同地にアトリエを構え制作に励んでいます。実家はみかん農園。アトリエはその選果場の最上階です。階下でご家族を含め、農園の人々が働くのを間近に感じながら、今回全27点組による、縦約4.8メートル、横約20.7メートルもの大作を描きあげました。

伊藤さんは作品を描く際に、まずその元となるイメージを三次元で実際に作り上げます。それを写真に撮った二次元のイメージを下敷きに、絵を描きます。今回の大作を

グッゲンハイム美術館のギャラリートークとギャラリーアクティビティ

1 シャロン・バツスキーさん（右） © JSPS KAKEN 24300315

2 勉強会の様子 © JSPS KAKEN 24300315

新年早々の1月9日、ニューヨークのグッゲンハイム美術館で教育部ディレクターを務められているシャロン・バツスキーさんを招いての勉強会が東京国立近代美術館で開かれ、これに参加する機会を得ました。美術館教育に携わる人を対象に少人数に限定したこの会は、実際にグッゲンハイム美術館で実施されている様々なギャラリートークを、まるで来館者の立場で参加し、一方でその目的や意図とポイントを聞きながら、方法を学ぶという場でした*。

ところで、ギャラリートークとはなんでしょう。当館では展覧会に関連する教育普及活動として、ほぼすべての企画展で、現在では「ギャラリートーク」ではなく「フロアレクチャー」を行っています。この二つは区別が曖昧で、「フロアレクチャー（学芸員によるギャラリートーク）」と表記している館があったり、出品作家自身による解説会を「ギャラリートーク」と題していたり、表記と内容にぶれがあるようです。当館では「なつやすみの美術館」展の教育普及事業の一つとして、「こどもギャラリートーク」という名前を使っています。

言葉の意味を考えると、フロア「レクチャー」とは展示室の中で行う講義・講演ですから、「学芸員による解説会」とも表記している当館のフロアレクチャーは、看板に偽りなしということになります。一方のギャラリー「トーク」は、お話をするということですが、ここで言う「お話」とは、お互いにする「会話・対話」のことです。参加者に問いかけをしたり、意見を出してもらったりしながら、作品の理解を深めてゆく「対話型鑑賞」という方法もありますから、広くはこちらに当てはまるでしょう。

今回の勉強会で学んだのは、最初に設定されたあるテーマに沿って3点を順に見る方法で、シャロンさんの問いかけと参加者からの自由な意見、それに関連してシャロンさんから示される作品の情報が、自然に次へ次へと作品理解へ近づかせてくれる、まさに「トーク」という名前にふさわしいものでした。あれほどの「境地」に到達するのはなかなか長い道のりで怖じ気づきそうにもなりますが、せっかく参加する機会を与えられたのですから、学んだことは少しずつ当館で活かそうと思っています。

とはいえ、自信を持てるところもありました。それはグッゲンハイム美術館で行われている様々な「ギャラリーツアー」のあり方です。「ツアー」と言うと、ガイドに従って、ただいくつかの目玉作品を見て回るというイメージでしょうか。もちろんそういうものもあるでしょうが、グッゲンハイム美術館の多くのツアーでは、展示室の中で書いたり、描いたりして、なんらかの「ギャラリーアクティビティ」と呼ばれている活動が行われています。

「ギャラリーアクティビティ」とは、展示室の外で行うワークショップのように、自分自身の作品を作ることを目指すのではなく、展示室（ギャラリー）の中で、展示されている作品理解の一助となるための制作活動です。展示室の中ですから、水や絵の具は使えません。グッゲンハイム美術館では、色紙を貼るための糊の代わりに透明のフィルムで挟むという方法でコラージュをしたり、鉛筆でスケッチやステンシルをしたりと、展示作品に害を与えない材料を選び、誰に

制作するに当たっても、アトリエの一角にイメージの元となる小空間が作られました。

そこには彼女がこれまでに制作した絵画作品や陶芸作品を中心に、自分の趣味によって集めてきた布やぬいぐるみなどが、選果場にあったみかんの木箱などを利用して組み上げられています。彼女の作品には、子どもの好きそうな下ネタやお化けやゾンビをモチーフにしたものも多いのですが、秘宝館、珍宝館を想起させる独特の世界は、まさに伊藤彩ワールドと言えます。

一見、理解不能で不可思議に見える世界ですが、その中に入った瞬間、私は彼女が今回の作品にこれまでの自分のすべてを込めて描きあげようとする確かな決意を感じました。そこにあるものが彼女の人生を走馬灯のように想像させたからです。その強い気持ちは完成した作品からも存分に感じていただけることだと思います。この空間から生まれた作品は、3月14日のオープン当日に誕生日を迎えるという、特別な運のようなものを「もっている」彼女の27年間のすべてを込めた、28歳の自画像です。

（宮本久宣）

3 展示室でのドローイング（グッゲンハイム美術館）
© Abbey Keener, 2013

でも簡単に使えるものでできるように工夫されていました。その様子をスライドで見ていると、「あれ、これってそのままうちのこどもギャラリートークと一緒じゃないの？」と思えるところがたくさんあったのです。

写真3は、タン・ダ・ウというシンガポールのアーティストによる金属彫刻を、子どもたちがスケッチしている様子です。直線が作り出すかたちは、鉛筆でも再現しやすく、描くことへのハードルは低いものでしょう。これと同じようなことを、当館でも2013年のこどもギャラリートークで、ジョージ・リッキーによる動く彫刻を題材に、そのベストポジションを描くというテーマで行っていたことを思い出しました。

年配の男性が手前でうずくまって何かを描いている写真4は、ネガティブな人格を表す言葉を数多くならべたクリストファー・ウールの作品がもとにあり、そこに自分で一つ言葉を加えてみようという課題で、実際の作品と同じようなステンシル型を使って文字を描き出しているところです。普通に文字として書けば簡単に済んでしまうところ、単語を構成する文字一つひとつを、真剣に塗り込んでいるのがわかります。この参加者たちは医学部の学生と先生だということですが、一番夢中になっていたのは、最年長の先生だったそうです。大人になるほど、手を動かすことに夢中になるというのはよくあることで、この夏に当館でもこんな光景を見ました（写真5）。これは孫雅由の作品を真似るように、線を描く練習をするという課題です。簡単に見えて、実際にやってみると難しく、終えたあとには不思議な達成感と元の作品の魅力が増しているのです。みなさん時間が足りないくらいに、真剣に参加してくださいました。

作品について人から説明を聞くのは、知らないことをすぐに知ることができますし、知識を得ることはそれだけでももちろん刺激的なことです。しかし手を動かすことで作った人の視点に近づけることや、教えられるのではなく自分で気がつけることは、説明からでは得られないまったく別の体験です。まだまだ実験的なつもりで行っていた当館の「こどもギャラリートーク」と全く同じ意図を持った活動が、あの実り多い「トーク」を実演してくれたシャロンさんのところでも行われているということに、なんだか背中を押してもらえた気がします。

当館でのこどもギャラリートークについては、NEWS No.76とNo.80で紹介しています。

（青木加苗）

＊コレクションと鑑賞教育〈2〉『グッゲンハイム美術館のギャラリートーク』（JSPS科研費・基盤（B）24300315「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」（平成24-26年度）代表：一條彰子（東京国立近代美術館）による）

4 マウントサイナイ医科大学の学生たちと教授 © Chad Heird, 2013

5「なつやすみの美術館4 生きている！」展（2014）でのこどもギャラリートークより

教育普及活動より

「美術館部」始動準備中！

筆者の密かな野望として、NEWS 80号(p.3)に書き記した、和歌山大学の「美術館部」設立計画。「なつやすみの美術館」展でたまごせんせいとして活躍してくれた学生たちを中心に、彼らが当館で継続的な活動をする一つの方法として、半ば冗談まじりに筆者が触れ回っていたものです。しかし言葉にすると夢が実現するとはあながち嘘ではないようで、学生たち自らが大学公認の部活動に昇格させるべく動き出しています。秋には「観光する美術」展の「わかやまっぷ」を「和歌山大学（未公認）美術館部」の名前で作り、冬には名古屋まで一緒に展覧会を見に行き、そこで教育普及担当学芸員にボランティアの活動内容についてお話を伺うなどしています。部活動として大学の承認を得るためには、最低1年の活動歴が必要とのことで、次の部活動登録の機会を狙って、会則や活動計画などを練りながら、着実に準備をしているようです。

そうこうしていると、あっという間に次の「なつやすみの美術館」展がやってくることでしょう。1年というサイクルの中で、学業と美術館での自主活動がどのように両立できるのか、彼らもまだ手探りですが、緩急ありつつも軌道にのせるべくがんばっています。展覧会の関連事業などにも顔を出しているかもしれません。どうぞ応援してあげてください。　（青木加苗）

館内では名刺がわりに缶バッジをつけています

Museum **Calendar**

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）　休館／月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

和歌山と関西の美術家たち　リアルのリアルのリアルの

2015.3.14（土）— 5.10（日）

近年よく耳にする「リアル」という言葉。「現実の」とか「本当の」といった意味の英語を元にしながらも、インターネット上の世界に対する現実世界を指したり、なんとなく嘘っぽい雰囲気も漂わせたり、本来の言葉の意味を超えて広がりを示しているように感じられます。

今回の展覧会では、和歌山県出身者を含め、関西を拠点に活躍する1970年から80年代生まれの美術家5人——伊藤彩、大久保陽平、岡田一郎、君平、小柳裕——の仕事を紹介しています。それぞれの作家は、自らが生きる世界、そして自分という存在の危うさやあやふやさを知りつつもそれが依って立つ足元を踏み固め、たぐり寄せようとするかのように作品を作り出します。新しい世代の美術表現から、現代における「リアル」の感覚を探る本展を、ぜひご覧ください。

小柳裕《The Light with the Palm Leaves》
2014（平成26）

保田龍門・保田春彦展

5.26（火）— 7.5（日）

日本の現代彫刻を牽引してきた彫刻家、保田春彦（1930～）と、その父、保田龍門（1891～1965）。父子で芸術の道を歩んだ二人の作品を紹介します。

なつやすみの美術館5　つぶやき　おはなし　ものがたり

7.14（火）— 8.30（日）

夏休み中の子どもたちが、美術に触れるきっかけを作ってきた展覧会。5回目となる今回は、言葉やおはなしを手がかりに、さまざまなジャンルを横断して紹介します。

ここだけの日本画

9.11（金）— 11.3（火・祝）

和歌山ゆかりの下村観山、川端龍子、野長瀬晩花、稗田一穂らを中心に、同時代の画家の作品も交えて、日本の近現代美術を作り上げてきた日本画の魅力を紹介します。

生誕110年　村井正誠展　ひとの居る場所

12.18（金）— 2016.2.14（日）

和歌山県新宮市で育った画家、村井正誠（むらい・まさなり、1905～1999）。ひとが時代と場所を越えて繋がりあえる絵画を求めて、描き続けた生涯を回顧する展覧会です。

宇佐美圭司回顧展

2016.3.1（火）— 4.17（日）

和歌山市で少年時代を過ごした宇佐美圭司（うさみ・けいじ、1940～2012）は、人体を記号化した絵画で注目を集めました。没後3年を機に、アトリエに残された遺作を中心に、その画業を一望します。

コレクション展 2015—春
— 5.24（日）
特集『版画』の明治
　—印刷と美術のはざまで

コレクション展 2015—夏
6.10（水）— 9.10（木）
特集 くりかえしの美

コレクション展 2015—秋
9.19（土）— 12.6（日）
特集 生誕120年　逸見享

コレクション展 2015/2016—冬
12.23（水・祝）— 2016.3.13（日）
特集 光について

コレクション展 2016—春
2016.3.29（火）—6月中旬（予定）
特集 謄写印刷工房から
　—印刷と美術のはざまで

第69回和歌山県美術展覧会
Ⅰ 11.19（木）—11.23（月）
Ⅱ 11.25（水）—11.29（日）
Ⅲ 12.2（水）—12.6（日）

メールマガジン・Facebookページ twitterのご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。また Facebook や twitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

TO THE MUSEUM 友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧（同伴者1名まで）
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加
（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
6. 版画の頒布会への参加

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690　担当：松原

和歌山県立近代美術館ニュース　No.82
編集発行／和歌山県立近代美術館　〒640-8137　和歌山市吹上1-4-14
Tel.073-436-8690　Fax.073-436-1337　http://www.momaw.jp/
発行日／2015年3月27日　デザイン／鶴田デザイン事務所　印刷／株式会社協和

和歌山県立近代美術館